

奨励

もし それでもだめなら

奨励	越川 弘英 [こしかわ・ひろひで]
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター副所長 同志社大学キリスト教文化センター教授
研究テーマ	キリスト教の実践神学 (礼拝、宣教、牧会)

ああ、エフライムよ
お前を見捨てることができようか。
イスラエルよ
お前を引き渡すことができようか。
アダムのようにお前を見捨て
ツェボイムのようにすることができようか。
わたしは激しく心を動かされ
憐れみに胸を焼かれる。
わたしは、もはや怒りに燃えることなく
エフライムを再び滅ぼすことはしない。
わたしは神であり、人間ではない。
お前たちのうちにあって聖なる者。
怒りをもって臨みはしない。

(ホセア書 11章8—9節)

そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

(ルカによる福音書 13章6—9節)

ぶどう園に 植えられたいちじく

「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。」(ルカによる福音書 13章6節)

「ある人」とはこのぶどう園の主人、オーナーです。ぶどう園にいちじくの木を植えるのは不思議な気もしますが、聖書の舞台である2000年前のパレスチナでは実際にそういうことも行われていたようです。ぶどうにしろ、いちじくにしろ、聖書のなかではしばしば登場する果物であり、人びとから親しまれ愛されていた果物でした。また時としてぶどうやいちじくは、神によって特別に選ばれた「選民」としてのユダヤ人の共同体を象徴するものとして登場する場合があります。イエス・キリストが語ったこのたとえ話でも、おそらくそういう意味で、ここにいちじくが出てくるのでしょう。ぶどう園の持ち主は「神」を象徴しているようです。

「実を探しに来たが見つからなかった」というのは、神が期待していたような「実」がなっていないということです。この「実」が何を意味するかは、いろいろな理解が可能です。神が人間に期待したこと、望んでいたことは何だったのか。それにもかかわらず、期待どおりになっていないこと、望んだようになっていないこととは何だったのか。

聖書のなかには、神が私たち人間に求めておられることについて、さまざまなことが書かれています。一つ一つ取り上げていけばきりがありませんが、それらをまとめるとすれば、「神を愛し、隣人を愛すること」に尽きると言えるでしょう。「神を愛し、隣人を愛すること」。それを追い求めるなかで、正義も平和も、真の意味での豊かさも力も、私たちが共に生きていくために必要なすべてのものが立ち現れてくるのです。

そのように理解するならば、いちじくの木に実がならなかったというのは、「神への愛、隣人への愛」が見当たらない、神の期待した人間世界が存在しないという現実の表現であると考えられるでしょう。

「薔薇ノ木ニ薔薇ノ花咲ク」

北原白秋の残した、ごく短いこんな詩があります。

「薔薇ノ木ニ
薔薇ノ花咲ク。
ナニゴトノ不思議ナケレド。」

(「薔薇二曲」安藤元男編『北原白秋詩集(下)』岩波書店 2007年 97頁)

当たり前すぎるほど当たり前のことを言っているにすぎません。「薔薇の木に、薔薇の花が咲いている。何も不思議じゃないけどね」というのです。白秋にすれば、この「不思議ナケレド」、「不思議じゃないけどね」という句の後に何ごとかの含みをもたせているのでしょう。ともあれ「薔薇の木に薔薇の花が咲く」とすれば、それは何の不思議もありません。

ところが、聖書は「いちじくの木にいちじくの実がならない」というのです。「これはいったいどうしたことか」というのです。ぶどう園のオーナーからすれば、それこそ「不思議」でならないのです。いちじくの木を植え、期待を込めて見守ってきたのに、その期待は裏切られました。神は人間に期待を込めて見守ってきたのに、期待どおりの人間、期待どおりの世界が全然実現していないことが不思議でならないのです。

薔薇の木には薔薇の花が咲きます。
ぶどうの木にはぶどうの実がなります。
いちじくの木にはいちじくの実がなります。
しかし人間は人間らしい実りを結ぶとは限りません。

期待外れ

皆さんは、多かれ少なかれ、自分が・誰かに・何かを・期待されて、この世を生きている存在だということを感じておられるでしょうか。それは家族からかもしれませんし、友人、あるいは学校の先生、アルバイト先の雇い主かもしれません。あまりに大きな期待をかけられるのもたいへんですが、しかし何も期待されないとしたら、そのほうがずっと苦しいことだろうと思います

結局、人間というのは何らかの人間関係のなかでしか生きていけない生き物ですから、周りの人びとが自分にどんな期待をもっているかいないか、その期待にどの程度応えてるかわからないということには、誰しも敏感にならざるを得ません。生きることは、そういう人間関係の積み重ねであるとも言えるのです。

期待には応えたいと思います。応えなければならぬと思います。期待される結果を出すことが、相手のためでもあり、自分のためでもあるのです。しかし、私たちはいつも期待どおりに生きているわけでもなければ、求められる結果を出せるというわけでもありません。

というよりも、しばしば、あるいはほとんどの場合、私たちは周囲の期待を裏切ったり、十分に答えられなかったり、「結果を出せない」という結果を出したりすることのほうが多いのかもしれません。まさしく「期待外れ」に終わることがあるのです。そして人生の大きな課題になればなるほど、そういう「期待外れ」がいくつも起こるような気がします。

今年、正月にいろいろな方から年賀状をいただきました。友人、知人、そしてかつての恩師からの便りを読みながら、自分自身を振り返ってみた時、おそらくはもっと違う期待、もっといろいろな期待をされていたのに、それに答えきれないまま何十年もの時間を過ごしてきたのかもしれないという思いを抱きました。おそらく多くのことをし残したまま、あるいは「期待外れ」と思われながら、自分の人生を終えることになるのかもしれない。

私が皆さんと同じ年齢だったころ、神学部の指導教授であり恩師であった藤代(ふじしろ)泰三(たいぞう)先生から、将来の進路に関して期待されていたことがありました。しかし当時の自分としては別の進路を考えていたので、内心では葛藤するところがあったのです。そんなある日、同じ神学部の竹中正夫先生から言われました。

「君の人生なんだから、君の思ったようにすればいいんだ。」 当たり前のことを言われてみて、しかしその一言で心がずっと軽くなった気がしました。結局、私は恩師の期待を裏切ったことで、自分の進みたい方向に進むことにしました。申し訳ないという気持ちはありましたが、それでいいんだとも思いました。

藤代先生も竹中先生も亡くなりましたが、今、振り返ってみて、それぞれに感謝の思いをもつと共に、果たして恩師の期待を裏切ってまで進んだ人生で、別の意味で、本当に両先生の期待に応えるだけの生き方をしてきたかという、内心忸怩（じくじ）たるものがあるのは否定できません。

ぶどう園の園丁

聖書のたとえ話の続きを読みましょう。

ぶどう園のオーナーは言います。

「もう三年の間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。」

今日のように効率万能主義の時代、結果がすべてという時代には、とりわけ如実に切実に響く言葉です。

期限は過ぎた。

結果は出ない。

出て行け。

お前のいる場所はない。

お前は「期待外れ」だった・・・。

厳しい言葉です。しかしこれが私たちの世界の現実でもあるのです。

ここに登場してくるのが、ぶどう園の園丁です。

「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。」

この「園丁」という人が何を象徴しているのか、私にはよく分かりません。神の怒りと人間の間に立って執り成しをしてくださるイエス・キリストご自身の姿だという理解があります。それでもいいと思いますが、あるいは、こちらもまた神ご自身のもう一つの姿を表す象徴であると理解することもできるのではないかと思います。

園丁は、オーナーとは違って、直接、畑で働く人であり、ぶどうやいちじくの世話をする人です。自分が手をかけて育てたものを切り倒すことを、ただちに受け入れることはできないのです。

もう少し時間をください。

チャンスを与えてやってください。

私も工夫してみます。

来年はなんとかかなるかもしれません・・・。

私が思うに、私たちの人生がたとえ「期待外れ」に見えたとしても、私たちがなんとかやっていると、こんなふうには私たちに執り成してくれる人がどこかにいるからです。たとえこの世の中で、執り成してくれる人間がいないように思われるような時でも、天にあって神が、そしてイエス・キリストが、私たちのために執り成していてくださいます。そのように、私たちは、知ると知らざるとにかかわらず、誰かに執り成されて、赦されて生きているのだと、キリスト教では信じています。

「もしそれでもだめなら」

イエス・キリストの父なる神の本質は、愛であると聖書は説いています。神は正義の神であると共に、恵みと憐れみに富みたまう方です。ホセア書にあるように、「お前を見捨てることができようか」「お前を引き渡すことができようか」「わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる」というもだえるような言葉のなかに聖書の神の愛が示されています。

最後にもう一度、この園丁が告げる言葉を聞きましょう。

「もしそれでもだめなら、切り倒してください。」

もう一年、チャンスをください。

もしそれでも実がならないようなら、仕方ありません。

来年は切り倒して下さってもけっこうです・・・。

私は皆さんによく考えてみていただきたいと思います。

その次の年、やはり実がならなかったとしたら、園丁はこの木が切り倒されるのを黙って見ているのでしょうか。それとも、もう一年、もう一度、待つてほしいと頼むのでしょうか。今年も「期待外れ」に終わった人間を、神はどのようになさるのでしょうか。私は、私自身がこれまでの人生のなかで受けてきた執り成しと赦しの経験から申しますが、園丁は、必ず・間違いなく・もう一度・同じことを言うのです。

年ごとに、繰り返し、積み重ねられた、神と隣人たちによるそのような執り成しと赦しのなかで、そして期待のなかで、今の私たちがいるのです。

人生はたしかに厳しいものですが、しかしまた必ず、あなたのために執り成しと赦しを祈っていてくれる人がいます。もしそういう人がいないとしても、イエス・キリストがあなたのために祈っていてくださいます。そのことを信じ、感謝して、今年もまたこの一年を生きなければなりません。